会報 第17号

1997. 3
日本家庭科教育学会
中国地区会

目　次

ある栄養士の話から …… 中国地区会会長　猪野 郁子 … 1
第16回日本家庭科教育学会中国地区会研究発表会並びに総会 …… 2
1 総会
2 研究発表会
3 共同研究
4 講演会要旨・資料 …… 6
《教育の現場から》 …… 森本 順子 … 4
《研究室から》 …… 西野 祥子 … 5
《研究発表要旨》 …… 10
本部だより …… 15
会員動向（新入会員・退会会員） …… 15
事務局だより …… 16
編集後記 …… 16

ある栄養士の話から

中国地区会会長　猪野 郁子

管理栄養士を病院で長くなさっている方から話を聞く機会がありましたが、その話を聞いたときはショックでした。

それは、妊婦さんの栄養指導でのことなのですが、一人一人の妊婦さんに、ここ数日の食事内容を記入してもらうと、中には、毎日炭水化物や脂肪のみの食事内容の人が何人か出てくるといいます。そこで、「あなたお野菜は」と聞くのだそうです。「野菜食べないといけませんか」という答えが返ってくるといいます。

妊婦ですから、女性であり、小学校から高校を卒業するまで少なくとも6年から7年は家庭科を学習しています。確か小学校5年生で、基礎栄養素を学習すると思いますし、中学校でも高校でも出てくると思います。その彼女たちが次の世代を自分の栄養で育てているその時点の食事に、習ったことが生きていないというそのことにショックを受けたのです。恐らく皆さんは、そんな女性はごくごくわずかであり、滅多にいない女性が集まっただけよ。と思われるかもしれません。そうかもしれません。しかし、小学校・中学校・高校と重ねて学習している筈の女性が、特殊な人であったとしても、このような食事をしているということについて、皆さんはどう思われますか。

家庭科の学習方法に問題はないのでしょうか。教材の提示の仕方に問題はないのでしょうか。

新福先生（元大阪教育大学教授）がかって被服製作というと小学校でもエプロン作り、中学校でもエプロン作り、高校でも然りと嘆かれたことを思い出します。

私は前号（第１６号）に、教師自身が「家庭科」という教科の必要性を認識し教科の魅力を持つべきだと述べましたが、それらをどのような形で生徒・児童に提供し、子どもの生きる力に結びつけるかということではないでしょうか。その日の仕事に追われる毎日で教材研究まで手が回らないという状況かもしれませんが、今私たちは踏ん張らないいけないと思います。

平成１０年に向けて、この地区会では『「生きる力」を育て学習の総合化を目指した家庭科の「教材開発」と「授業実践」』を研究テーマに、共同研究を始めます。詳しくは後に譲りますが、子どもの頭の引き出しにしまわれた知識が必要なときに引き出されるような、そんな家庭科を目指したいと思います。

第16回日本家庭科教育学会中国地区会研究発表会並びに総会が平成 8年 8月24日（土）広島大学学校教育学部で開催され，広島大学学校教育学部の多大なご協力により，すべて盛会裡に終えることができました。

《総　会》（13:00～13:30）

	司会進行	会場校実行委員
1	開会の辞	田結庄順子
2	会長挨拶	猪野　郁子
3	会場校挨拶	田村　咲江
4	議長選出	中村喜久江
5	議事	

報告事項

1）平成７年度庶務報告　事務局
2）平成７年度会計報告　事務局
3）平成７年度会計監査報告　監査委員　佐藤　園

審議事項

1）平成８年度事業計画（案）　事務局
2）平成８年度会計予算（案）　事務局
3）平成９年度研究発表会並びに総会開催について　会長
4）その他

6　次期大会開催地区代表挨拶　岡山県
7　閉会の辞　会場校実行委員

【報告事項】

1　中国地区会会員数（平成8年度7月現在）

鳥取県　12名　広島県　50名
島根県　31名　山口県　33名
岡山県　34名　計165名

2　平成 7年度事業報告
（平成7年4月～平成8年3月まで）

年月日　事項
平成7年5月　平成 7.8年度役員選出依頼（地区役員宛）
平成7年6月　日本家庭科教育学会中国地区会第15回研究発表会ならびに総会プログラム発送（全会員宛）
平成7年6月　共同研究についての問い合わせ（担当田結庄順子先生より）
平成7年8月　共同研究執筆要領について（担当田結庄順子先生より）
平成7年8月　役員会開催（山口大学大学会館）
平成7年8月　日本家庭科教育学会中国地区会第15回研究発表会ならびに総会開催（山口大学大学会館）
平成8年3月　共同研究原稿締切
平成8年3月　会報16号発行，発送（全会員）日本家庭科教育学会中国地区会第16回研究発表会ならびに総会案内発送（全会員）

3　平成 7年度決算報告
（平成 7年度 4月 1日～平成 8年 3月31日）

《収入の部》

費　目	予算額	決算額	摘　要
前年度繰越金	170,486	170,486	
地区会費	110,000	45,000	1,000×45
本部からの地区活動費	30,000	30,000	
本部からの退付金	45,010	0	82名＋7名
教大協からの補助金	40,000	0	
雑収入	5,000	1,862	貯金利息他
合　計	400,496	247,348	

《支出の部》　（単位：円）

費　目	予算額	決算額	摘　要
総会費	70,000	70,000	
通信費	50,000	22,200	役員選挙他
事務用品費	2,000	0	
会議費	20,000	8,000	第一回役員会
印刷費	80,000	49,955	会報
雑費	5,000	0	
共同研究積立費	100,000	0	特別会計
予備費	73,496	0	
合　計	400,496	150,155	

来年度繰越金　247,348-150,155=97,193

【審議事項】

1　平成8年度事業計画（案）

年月日　事項
平成8年6月　共同研究報告書発送（全会員宛）
平成8年6月　第15回研究発表会ならびに総会プログラム発送（全会員宛）

平成8年8月　役員会開催（広島大学学校教育学部）
平成8年8月　第15回研究発表会ならびに総会開催（広島大学学校教育学部）
平成9年3月　会報第17号発行・発送（全会員宛）
第18回研究発表会ならびに総会案内発送（全会員宛）

2　平成8年度予算
（平成8年4月1日～平成9年3月31日）
《収入》　（単位：円）

費　目	予算額	摘　要
前年度繰越金	97,193	
地区会費	150,000	1,000×150人
本部からの地区活動費	30,000	
本部からの還付金	48,685	
教大協からの補助金	40,000	
雑収入	100	
合　計	355,978	

《支出の部》　（単位：円）

費　目	予算額	
総会費	70,000	
通信費	20,000	会報他
事務用品費	2,000	
会議費	10,000	
印刷費	50,000	会報・名簿等
雑費	2,000	
共同研究費	200,000	平成7，8年度分
予備費	1,978	
合　計	355,978	

3　平成 7,8年度役員
地区会長　猪野郁子（島大）
地区副会長　福田公子（広大）
永原朗子（山大）
監事　佐藤　園（岡大）
堀内かおる（島大）平成7年度
島井葉子（島大）平成8年度
庶務　多々納道子（島大）
会計　西野祥子（島大）

《研究発表会》（13:30～14:45）
（座長　永原朗子）
1．C．ハントの高等教育思想に関する一考察
広島大学大学院教育研究科　山本かおり
2．小学生における水環境の意識と実態について
島根大学教育学部　曽我部國久
○池田　綾子
3．”他者理解”を目標とした模擬体験学習（一事例）
島根県立出雲農林高校　周藤　紀子
（座長　福田公子）
4．家庭科における交流授業の現状と課題
広島大学学校教育学部　伊藤　圭子
広島大学大学院学校教育研究科
○久島　恵
北乗　弓果
西楽　慈子
山本　奈美
5．交流と体験を通しての障害者理解
ノートルダム清心女子大学　百合草孝子

《講　演》（15:00～16:30）
題目　「学び」の対象としての人間
講演者　髙橋　超
（広島大学学校教育学部付属教育実践総合センター教授）

《共同研究》
平成10年度に向けて新たに「生きる力を育て学習の総合化を目指した家庭科の教材開発と授業実践」というテーマで共同研究を募集しましたところ、次の 9件の参加申し出がありました。

研究テーマ	学校段階	研究者代表
1．「学校給食について」	小・中	田結庄順子
2．学科家庭科における「課題研究」	高	芦田　迪子
3．親子の共通体験を題材にした保育授業	高	菅原　晃子
4．家族・家庭生活の価値観の形成	高	小林　京子
5．高校家庭科の教材研究・授業実践	高	柴　静子

6．生きる力を育む小学校家庭科の食物領域の授業

小　宮里　智恩

7．小学生の高齢者理解　―プレゼントづくりを通して

小　多々納道子

8．中学校家庭科における環境教育の実践
―水環境の保全―

中　多々納道子

9．中学校で「生きる力」を育てる授業の試み

中　島井　葉子

日々の授業実践から

鳥取大学教育学部附属中学校　森本　順子

現在、私は２年生の担任をしているのだが、期末テストを控えたある日、一人の生徒が生活ノートの日記欄に次のように書いてきた。

「‥‥ところで先生、家庭科はどんなことがテストに出るんですか。みそ汁の作り方とか、ディベートのとか‥‥。家庭科は難しいですよね。１年生のころは嫌だったんだけど、家庭科で自分の食生活のことを考えられたりして、すごい教科だと思いました。」

これを読んで、正直なところ複雑な気持ちになった。２年生の「食物」学習は興味を持って学習してくれたのだなぁといううれしさと同時に、１年生の「家庭生活」の学習では自分自身の指導力不足を感じたからである。考えてみると、私自身「家庭生活」を教えることにどこか苦手意識があり、それが生徒に反映しているのかもしれないと反省したことであった。

ところで、生徒の生活ノートにも書いてあったように、本年度初めて授業にディベートを取り入れることを試みた。ディベートについては、その形式がいろいろあり、授業に取り入れることにも賛否両論あるようである。２年生の生徒たちは、ちょうど国語の授業でディベートを学習し、ゲーム的な楽しさも味わっていたところであった。家庭科では、討論のしかたを学ぶことが目的ではないので、好都合であった。食物学習のまとめとして、広い視野からよりよい食生活を考えていこうとする態度を育てることを目的として、討論会を行う準備としての調査活動を重視して、ディベートを取り扱うことにした。事前に生徒全員に食生活に関わるテーマ（論題）について資料を収集させ、自分の考えをまとめさせたのである。

ディベートを扱う際、特に重要なのはそのテーマである。食物学習のまとめであること、資料が収集しやすく討論が盛り上がりそうなものであることを考え合わせ、教師の側でいくつか提示したものの中から、アンケートによって決定した。アンケートでテーマとして最も多くあがったのが『朝食はご飯食がよいか、パン食がよいか。』であった。これについての生徒たちの意見は、ほぼ半々に分かれていた。このテーマは栄養面はもちろんのこと、文化的な面、経済的な面、さらには食糧自給などの面にまでも視点が広げられると考えた。

その他ディベート討論会について配慮したことは、司会者、ディベーター以外の生徒は全員判定者となって判定表に記録させながら聞かせたこと、調査活動を重視することから立論の時間を長めにとり図表やグラフにまとめて提示してもよいとしたこと、討論会のあとで勝敗の結果に関係なく改めて自分の考えをまとめさせるようにしたことなどである。

実際に授業を行ってみて、ディベートに調査活動を生かすことの難しさを感じた。立論において資料の使い方を工夫すれば、より効果的であったのにと思われた。これはチームを作ってから１週間余りしか時間がなかったことや、ディベートそのものの訓練不足にもよるのではないかと考える。しかし、ディベーターの生徒をはじめ大部分の生徒たちは予想以上によく活動し、考えを深めたようだ。結果としてはご飯食派の勝ちとなったが、自分の体験に裏打ちされて討論できるテーマがよかったのではないだろうか。先の生徒の授業日の生活ノートには、このように書かれていた。

「いやぁ、おもしろかったなぁ、ディベート。Y君の発言もよかった。やっぱりご飯はいいナ。でもパン食派もなかなかよかった。F君の発表が明確だったと思う。反駁でつぶせなかったのが残念！とっても勉強になったぞ。今日の授業はとてもよかった。」

マンネリ化しがちな日々の授業において、少しずつでも新しい取り組みをしていきたいものだと思っている。

《研究室から》

未来の鍵～家政教育への思い

島根大学教育学部　西野祥子

南国で生まれ育った私が，ここ松江で5回目の冬を迎えています。長い山陰の冬は，春を迎える喜びを初めて私に教えてくれました。

大学での教育も研究もまだ歩き出したばかりで，この原稿を書くことには少なからずためらいがありますが，自分を振り返る良い機会になると考え，日頃考えていることを思いつくままに記してみたいと思います。

私の専門は家政教育学で，研究の中心テーマは「ヒューマンエコロジー思想を基盤とした家政教育カリキュラムの構築」です。

一時期は，家政学，家政教育学を雑学の寄せ集めとしてある程度割り切って学んでいた私が，現在の道にすすむきっかけとなったのは，大学院生時代のゼミで出会ったエレン・H・S・リチャーズの伝記（ロバート・クラーク著『エコロジーの誕生』新評論）でした。リチャーズはアメリカで最初の女性科学者で，衛生化学の先駆者であり，広義の環境科学としてアメリカ家政学の礎を築いた人として知られていますが，多岐にわたる彼女の活動は共生的人間観に基づくヒューマンエコロジー思想によって支えられています。今日でさえエコロジーという言葉が多く用いられるようになりましたが，最もはやくエコロジカルな（生態学的・環境調和的）ものの見方を取り入れた科学がアメリカ家政学なのだそうです。また彼女の研究の成果は常に教育的手段を通して必ず人々に還元されており，環境と調和して生きていける人間の育成に生涯を捧げた人でもありました。

今から1世紀以上も前のリチャーズの先見性と信念と教育・研究にかける情熱に，私はたいへん心を打たれました。わが国の家庭科教育が少なからぬ影響を受けているアメリカ家政学が，社会問題解決という視座のもと市民のための科学として誕生したこと，また，科学の細分化がすすむなかで，人類の福祉の実現に向けてあらゆる科学を人間の生活に統合するものとして誕生したということを知ったゼミでの経験は，これからの家政教育，家庭科教育のあるべき確かな方向性と，生涯持ち続けるに十分なほどの家政教育研究への情熱を私に与えてくれました。

今日の私たちの暮らしは，科学技術と産業が進展したことによって物質的にはかなり豊かになりましたが，それらの進展がもたらした負の側面，例えば，私たちの毎日の意思決定が遠い国の人々の貧困と決して無関係ではないということを，私たちは知らなくてはなりません。また，教育が抱える問題や福祉，環境，いのちをめぐる問題，ジェンダーの問題，高度情報化社会をいかに生きるかという問題等，私たちの暮らす社会が抱えるこれらの問題に対し，家政教育は，人と人，人と自然，人ともの，人とテクノロジー，人と情報とがいかに共生していくべきかを考える教育，個々のライフスタイルや人間生活のあり方を常に社会的視野に立って問う教育として応えていかなければならないと思います。

私の研究室では，研究室生がそれぞれの関心や個性を生かし，さまざまな研究テーマに取り組んでいますが，家政学や家庭科教育の思想的・哲学的基盤と展望についてのゼミを通して研究室員が共通の理解をもったうえで各人の研究を行うようにしています。ですからどの研究に携わる者も，最終的には「ヒューマンエコロジー思想を基盤とした家政教育カリキュラムの構築」という大きな研究テーマにつながるという点で，目標を共有しています。

近年の研究は，ホリスティック教育（Miller, 1990）や，ＳＴＳ（Science, Technology and Society）教育理論に明確に打ち出された全体論的思考，および，学習者の主体的な探究活動を支援する教育方法を，家政教育カリキュラムに導入することに焦点を当てています。

家族や社会，地球が抱える問題に対し，共同体に暮らす一員としてひとりひとりがどのように責任を果たしていくのか，という視点をより一層重視した市民教育としての家庭科教育プログラム（通称HE-Com:Home Economics in the Community）の開発が具体化されつつあります。授業では，まず，学習者が主役となれる配慮が求められます。教師は，さまざまなレベルの共同体を意識させ，多様な価値への理解と，関連性に焦点を当てた科学的・批判的思考能力を育てること，そして最終的には一市民として責任ある意思決定，社会参加ができるように学習者を支援することで，日常生活を大切にし，健康や平等，平和や福祉といった普遍的な価値に気づかせる授業づくりを目指しています。

男女がともに学ぶ家庭科が実現した一方で，家庭科の教育内容の精選や教科の統廃合も含めて教育改革が議論されていますが，かたちはどうであれ，家庭科独自のものの見方（関わりをとおして全体を見，全体とのかかわりのなかで個々の生活問題の解決を目指すというものの見方。関わりのなかで自己の生活をみつめるという見方）が，教育の営み全体にとって，ますますその重要性を強めていくことは疑う余地がありません。

できるだけたくさんの人に家政学や家庭科教育の精神や哲学的基盤に触れていただき，家庭科教育を魅力的で情熱を傾けるに値するものと感じていただけるよう，また21世紀を生きる人々の教育を先導するほどに意味のある家庭科教育の役割を改めて認識していただけるよう，私自身，あらゆる機会に努力していきたいと思っています。

1996. 8. 24　日本家庭科教育学会中国地区会　　資料

「学び」の対象としての「人間」

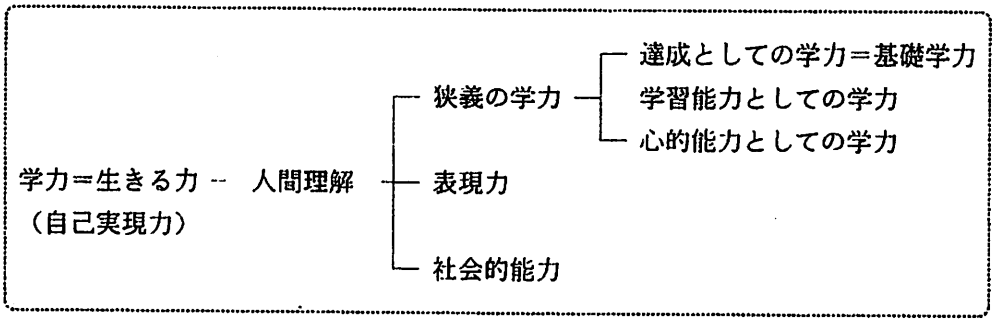
広島大学学校教育学部
附属教育実践総合センター　　髙橋　超

1．児童生徒の今日的状況

①自立の遅れ（基本的生活習慣，主体的進路選択等）
②健康・体力（感染症の増加，肥満傾向，視力，筋力，柔軟性，持久力等）
③社会性の遅れ（人間関係能力等）
④規範意識の未形成
⑤いじめ，不登校，犯罪・非行等の増加

2．学校教育の転換

①学力観の転換（「新しい学力観」，「生きる力」の育成）
②学校教育観・教育内容の転換（「生涯学習」としての「学校学習」）
③授業観・方法の転換（「教師主導型」から「教師支援型」）
④教育評価観の転換（「成果評価」から「プロセス評価」）



3．現行学習指導要領における「人間」の取扱い

(1)小学校

①理科（第３学年ー第６学年）
「生物と環境」
②家庭（第５学年ー第６学年）
「家族の生活と住居」
③体育（「保健」，第５学年ー第６学年）
第５学年：体の発育と心の発達，けがの防止
第６学年：病気の予防，健康な生活

(2)中学校

①社会（公民的分野）

・現代の社会生活：個人と社会，現代の文化と生活，情報と社会

・国民生活の向上と経済：生活と経済，国民生活と福祉，経済生活と国際協力

・民主政治と国際社会：人間の尊厳と日本国憲法，民主政治と政治参加，国際社会と平和

②理科（第２分野「地学・生物」）

③保健体育（「保健分野」）

・心身の機能の発達と心の健康（第１学年）

・健康と環境（第２学年）

・傷害の防止（第３学年）

・疾病の予防（第３学年）

・健康と生活（第３学年）

④技術・家庭（家庭：「家庭生活・保育」）

・家庭生活：家庭の生活，家庭の経済，家庭の仕事

・保育：幼児の心身の発達，幼児の生活，幼児の発達と環境との関係

理科	人間の体の構造や機能，生命維持の仕組み等（第３－６学年）
家庭	家族生活のあり方や住居環境等（第５－６学年）
体育	身体やこころの発達変化，病気の理解や予防等（第５－６学年）

＜小学校のおける教科別の「人間」の取扱い＞

社会（公民）	個人の社会生活，国民生活と経済・福祉等
理科（第２分野）	動植物の生命現象等
保健体育（保健）	心身の発達過程，自我形成，適応と精神的健康 疾病・傷害の処置や予防等
技術・家庭	家庭生活の機能，家族関係，幼児の心身の発達等

＜中学校のおける教科別の「人間」の取扱い＞

4．「人間」をいかに学ぶか

○間接的理解から直接的理解へ
○断片的理解から体系的理解へ
○間接経験的理解から直接経験的理解へ

「人間」を学びの対象へ
〔人間・生活学習のカリキュラム化〕

香川大学教育学部附属高松中学校における人間科の柱と内容項目

柱	内容項目	柱	内容項目	柱	内容項目
自然的存在としての人間	(1)自然と調和して生きる自然環境，自然界界のつり合い	社会的存在としての人間	(1)人間関係の中で生きる 信頼，協力，差別と平等	理知的存在としての人間	(1)知性を高めて生きる 学問，芸術
	(2)自然の恵みを受けて生きる 資源，エネルギー		(2)社会の仕組みの中で生きる 規則，自治		(2)心の充足を求めて生きる 奉仕，余暇の活用
	(3)家族とともに生きる 親子，兄弟関係 家族愛，高齢化		(3)国際社会の中で生きる 異文化理解，国際問題		(3)将来を見通して生きる 進路選択，職業

「「人間関係を結びつつ人間性豊かなものの見方を学ぶ学習の展開」
(研究報告第1巻・第11号，1993，香川大学教育学部附属高松中学校刊)

表1　日常行動に対する興味測定項目の因子分析結果

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
性格の形成	0.68237	0.10914	0.15346	0.19195	0.05263
自己意識	0.67535	0.24490	0.17518	0.20665	-0.03281
心のやまい	0.65351	0.21052	0.43609	0.02794	0.08386
やる気	0.64255	0.29245	0.05412	-0.02387	0.25777
不安感・孤独感	0.61442	0.11066	0.30528	0.09002	-0.05586
意識と無意識	0.57596	0.12733	0.12454	-0.02478	0.40503
視線や顔の表情	0.55942	0.13560	0.12037	0.32566	0.11573
性格テスト	0.55757	0.13727	0.08828	0.25103	0.05975
集団の人間関係	0.52589	0.38766	0.06003	0.28599	0.16504
心の健康の維持や増進	0.51709	0.27398	0.11966	0.19045	0.30171
欲求不満の原因やその解決	0.50863	0.16460	0.40383	0.18127	0.17838
病気力	0.49008	-0.02015	0.35284	0.03821	0.21495
知能の形成や知能テスト	0.47076	0.05961	0.11765	-0.05393	0.40125
精神的な病気を治療する カウンセリング	0.45417	0.37709	0.35497	0.02700	0.00643
夢	0.43378	0.20977	-0.13287	0.28840	0.21133
集団のリーダーシップ	0.39980	0.30642	0.11637	0.21124	0.15862
進路・職業選択	0.34922	0.30680	-0.13918	0.19460	0.23697
親子関係	0.05301	0.67611	0.12624	0.23720	-0.01116
ボランティア活動	0.21255	0.63952	0.16031	-0.00168	0.01645
援助行動	0.40961	0.57791	0.07927	0.06213	0.15280
きょうだい関係	0.15365	0.54467	0.11183	0.15349	0.13016
差別や偏見	0.11738	0.53589	0.36105	0.03744	0.06750
言葉によるコミュニケーション	0.30238	0.52935	-0.10193	0.17931	0.13080
身振りや動作などによる コミュニケーション	0.18591	0.52273	0.10726	0.11429	0.42907
先生と生徒の関係	0.19805	0.48463	0.09272	0.07139	0.32234
夫婦関係	0.19759	0.45657	0.23815	0.34492	0.15241
交通事故	0.01834	0.32181	0.29196	0.26115	0.20591
家庭内暴力	-0.00368	0.20682	0.72802	0.02425	0.05174
校内暴力	0.02217	0.16262	0.72373	0.12551	0.12533
攻撃行動	0.22124	-0.10198	0.59806	0.06191	0.24671
自殺	0.24563	0.02671	0.59453	0.14182	0.13858
犯罪・非行	0.20209	-0.06515	0.57791	0.07462	0.08518
いじめ	0.14834	0.35212	0.55346	0.17865	0.04137
離婚	0.05126	0.25473	0.54168	0.06190	0.09550
不登校	0.24454	0.41118	0.49653	0.17172	0.03309
うわさの伝わり方	0.12821	-0.11005	0.39981	0.38734	0.21916
宗教	0.14318	0.21476	0.32943	-0.15744	0.29159
地震などの災害における パニック	0.23797	0.19162	0.31320	0.10796	0.27372
異性に対する魅力	0.35367	0.07952	0.19175	0.74093	-0.02117
踊りや歌などの流行	0.02791	-0.08049	0.05674	0.72783	0.20852
恋愛行動	0.15339	0.28154	0.14499	0.70386	-0.09471
女らしさ・男らしさ	0.20992	0.13913	0.08650	0.61477	0.11894
性行動	0.26981	0.01536	0.37570	0.59723	-0.01783
品物を買う行動	-0.03179	0.24603	0.02374	0.54362	0.09683
学校などでの友人関係	0.28704	0.37164	-0.01092	0.53111	0.09276
幸福感	0.41784	0.20273	0.07615	0.47461	0.05582
プライバシー	0.36760	0.13892	0.16718	0.39653	0.31478
コンピュータと人間	0.14392	0.05900	0.09803	-0.07189	0.68097
カルチャーショック	0.18738	0.27122	0.22009	0.03034	0.56895
感染症法の手口	-0.13467	0.04776	0.32403	0.19194	0.54184
マス・メディアの影響	0.20974	0.10345	0.04596	0.32569	0.51102
自動車やバイクの運転行動	-0.07123	0.10850	0.04686	0.38805	0.47086
選挙などでの投票行動	0.05931	0.35894	0.21978	-0.12749	0.45506
スポーツ大会などでの 「あがり」の心理	0.33914	0.14559	0.03217	0.20282	0.43882
集団のまとまりや雰囲気	0.36961	0.10748	-0.01810	0.22141	0.42561
スポーツ・ファンの心理	0.11139	-0.01124	0.10896	0.15541	0.41745
ものを覚えたり、 忘れたりすること	0.39574	0.08904	0.10607	0.02879	0.39852
固有値	7.037282	5.116289	5.033382	4.900362	4.151660
寄与率	12.35%	8.98%	8.83%	8.60%	7.28%

注）表中の□は、負荷量.40以上のものに付されている。

1．C．ハントの高等教育思想に関する一考察

広島大学大学院　　山本かほり

1．目的

本研究は，アメリカにおけるホームエコノミックスの成立期に活躍した家政学者が何を試み，ホームエコノミックスの使命についてどう考えていたかを明らかにすることを目的としたものである。今回は，C．ハント（Caroline Hunt：1865～1927）を取り上げた。我が国においてハントは，『エレン・H・リチャーズの生涯』の著者として知られるものの，これまで，詳細について明確にされていないため，研究の意義は大きいものと考えられる。

2．方法

アメリカ，日本両国の家政学関係の諸機関紙，文献を参照し，ハントの高等教育思想について考察を行う。その主な参照資料は，Marjorie East著"Caroline Hunt：Phirosopher For Home Economics"（1982），"Proceedings of the Lake Pracid Conference on Home Economics"（1899－1908），および松下英夫著『ホーム・エコノミックス思想の生成と発展』（1976年，同文書院）である。

3．結果

(1)ハントは，大学における家政学教育について，研究対象の大半は化学・物理・細菌学・社会学などの分野で示されることが可能だが，"家族集団による社会資源の利用"と定義される特別な分野は，全学部が集結しても十分に示すことできないと述べ，ホームエコノミックスは他分野からの支援を受けながらも，独自の研究を行うべきだと考えていた。

(2)ハントは，大学におけるホームエコノミックスは"学生を実生活に適応させるための専門課程"であると位置付けており，大学卒業後は実際の家事に関してそれが必要とされるため，大きな価値があると考えていた。そして，その研究の直接的な目的は，家庭で日常的に利用する食品・織物などの素材を完全に理解することであるが，最終的には賢い消費者としてそれらの利用を促進することだと考えていた。

(3)1903年，ウィスコンシン大学でハントにより計画・実行された，ホームエコノミックスの課程は，従来のように料理・裁縫といった技術的側面を重視したものでなく，知識教育を重視したものだった。このことは，ハントが技術教育の前提として，一般的な広い知識の必要性を認識していたことの現れだと考えられる。

2．小学生における水環境の意識と実態について

島根大学教育学部
曽我部　國久
○池田　　綾子

【目的】

最近は、地球の温暖化、オゾン層の破壊、森林破壊など、地球規模での環境問題が大きくクローズアップされている。このことより環境問題について指導する必要がある。しかし、環境教育を行う場合に、地球規模の問題をいきなり取り上げるより、身近な地域素材を取り扱うことが、子どもたちの意欲や実践力に結びつくと考えられる。

松江市周辺には、宍道湖や中海があり、最近では本庄工区干拓の問題が取りざたされていることから、子どもたちの身近な「水」について取り上げ、水質保全に対する子どもの意識や行動の実態を明らかにし、その結果より課題を把握する。

【方法】

1995年11月に質問紙法による調査を行った。調査対象は、松江市内の小規模＜4 校＞中規模＜2 校＞大規模＜5 校＞の小学校の4,5,6 年生、計2087名（男子1039名・女子1021名）

【結果】

(1)水質汚濁（汚染）についての認識については、ほとんどの子どもが認識しており、自然体験をしている子とあまりしていない子と比較してもほとんど差がなかった。このことより水質汚濁（汚染）についての認識は、自然体験と直接は結びつかないといえる。

(2)水質汚濁（汚染）の原因として、全体では「油」、「工場排水」、「ゴミを捨てる」を挙げる割合が非常に高い。学年別にみても、5 年生から「工場排水」を挙げる割合が増加し、逆に「家庭排水」に関する項目を挙げる割合が減少している。

(3)水質保全に配慮した行動の実態については、「合成洗剤の使用量」「食器についたマヨネーズや油の処理」「とぎ汁の処理」以外の項目では配慮した行動をとっていた。また、水質汚濁（汚染）の原因についての認識差から分析したが、ほとんど差がみられなかった。

(4)水を汚さないように努力している子どもは、認識も高く、どの項目でも配慮した行動をとっている。

【まとめ】

5 年生の社会科での「公害」学習とともに、家庭科における「家庭排水」の指導の大切さがわかった。

3．“他者理解”を目標とした模擬体験学習　(一事例)

島根県立出雲農林高等学校
周　藤　紀　子

・目　的

私たちは、様々な人々と、様々な形で関わり合いを持ちながら生きている。他者と共に生きるためには、他者にも自己が存在することを理解し、時には他者の価値観や自己を認めることが必要ではなかろうか。

生命がある限り、生き物は全て例外なく心身の発達を続ける。安定した成長期を過ぎるとこれまで経てきた発達過程を逆行するかのような変化を生じるようになる。この変化を特に老化と言い、この変化を悲観するのは、誰の心にも喜ばしい変化とは映らないからである。これが特別な現象ではなく、当たり前のことであることと受けとめ、さらにその状態における心の不安や失望感を共感することは、老化現象を迎えた高齢者と共に生活する上で、大切な他者理解であると考える。これらを老化とは正反対の過程にある若さあふれる高校生たちが学習できる方法を考察してみたい。

・方　法

学習題材　老年期を生きる

1)“年をとる”と私たちはどうなるのだろう。

―模擬体験してみよう―（２時間）

学習目標　・身体面の不便さを模擬体験し、共感できる。

・共に生きるためには、互いにどのような援助が必要か、考える。（援助する立場―援助される立場）

・結　果

教室を離れ、開放的な自由な空気の中での学習であったため、中には遊びの時間と錯覚してしまい満足な学習のできない生徒もいた。また、介助を受ける側の気持ちを体験することは、その苦痛や屈辱感を感じることとなり、生徒の中には老化現象への不安感、失望感を強く抱く結果となった者もいた。それが高齢者や老いに対する拒絶観になっては、決してよくない。さらに肯定的に受け入れ、学習できる配慮が今後の検討課題となった。

さて、物事を主観的に受けとめ、他者を自分の価値観でしか理解しようとしなかった生徒たちにとって、このような模擬体験学習は貴重な体験となったと思う。尊い生命への再認識を深め、それぞれの人達に対して相手の世界や価値観で考えようとするきっかけとなったのではなかろうか。そのような姿勢があって初めて、福祉やボランティアという課題を心から考えることができると思う。

4．家庭科における交流授業の現状と課題

広島大学学校教育学部　伊藤圭子
広島大学大学院　久島　恵　北乗弓果
西楽慈子　山本奈美

［目的］

平成5年度から交流教育制度が開始され、今後ますます障害児と健常児が共に学ぶ機会が増えると推察される。特に家庭科は、交流授業（通常学級と障害児学級の児童が同一教室で一緒に行う授業）が行われることが多い教科であるが、交流授業を実際に行っている家庭科教師からは、授業を実践する上での困難な状況が多く挙げられている。しかし、家庭科授業における問題状況およびそれを解決する方途を示した報告が乏しい状況である。

そこで、より充実した家庭科授業を行う際の示唆を得ることを目的として、家庭科における交流授業の現状とその課題を把握する。

［方法］

広島市内の障害児学級を設置している公立小・中学校117校（小学校80校、中学校37校）の家庭科担当教員を対象に、1995年10月に質問紙郵送法により調査を行った。有効回収率は43.6%であった。

［結果］

1. 交流授業を行っている（いた）家庭科担当教師は、全体の84.0%と多く見られた。しかし、それらの教師のうち養護学校教員免許を有していたのは6.3%であった。さらに、交流授業を行っている（いた）教師の62.0%は、家庭科担当教師のみで授業を行っていた。
2. 交流授業を行っている（いた）教師に家庭科の交流授業に対する自信を問うと、「迷いながらも行っている」(79.1%)「困っている」（11.6%)を合わせると90.7%の教師が自信をもっているとはいいがたい状況が見られた。これらの教師が挙げている困難点としては、「障害児に関する専門的知識にともなう指導上の不安」、「授業内容を障害児学級の子どもと通常学級の子どものどちらに合わせるか」、「授業時間の不足」などの順に多く見られた。
3. 家庭科の交流授業を行うにあたっての改善策としては、障害の程度に応じた指導目標・内容の配慮、補助教員やティーム・ティーチングの必要性、授業内外での個別指導、教材の開発・精選の必要性、障害児にも安全で活動しやすい施設・設備の必要性などの意見が多く見られた。

5. 交流と体験を通しての障害者理解

ノートルダム清心女子大学

百合草　孝子

1．目的

家庭科教育においての福祉を考える上で，又，障害児の家庭科教育をする上で，まず教師自身が障害者を理解しなければならない。教員養成において望ましい教員の資質として，障害者と共に生きる心を育てることを目的とし，教育内容と方法を検討する。

2．方法

(1) 障害者との交流として①"さをり織り"のファッションショー参加と②手織りの実習，(2) 福祉施設でのボランティア活動，(3) 視力低下の模擬体験とその介助，(4) 障害者に対する意識調査を行った。

3．結果

(1) ①学生は障害者が織った作品の説明を聞くと共に，作品を着てファッションショーに参加することにより，彼らが持っている暖かさや個性豊かで明るい雰囲気に触れ，楽しかったと感じている。そして，彼らが持っている感性のすばらしさをを知ると共に，親子の絆や目的を持って前向きに生きている姿に感動し，自分の生き方を見つめている。障害者も人に認められることにより自信を持ち，生き生きとしており，保護者は出会いの大切さを痛感している。②障害者がリーダーシップをとり，手織りを学生に指導したので，学生は自然に接し，障害者の人格を正しく理解することができた。対等の立場で交流する方法は有効であると思われる。

(2) 作業を通して子供のことを思うと共に施設の仕事の大変さを知り，介護者に敬意を表している。活動に対しては，役にたったのか心配もしていたが，「喜んでもらって嬉しかった。これからは，機会があれば何かに参加しようと思っている」と，積極性も出て，回りの人に目が向けられるようになった。

(3) 視力低下の模擬体験により，日常の不便さや気持ちが少しでも理解できたようで，施設設備の改善などの問題提起をしている。介助者もそのあり方を考え行動している。体験学習は有効であるので，模擬体験の教材を学生に考えさせたい。

(4) 学生の障害者に対するプラスイメージは暖かい・優しい・素直・明るいであり，マイナスイメージは遅い・無能であった。障害者の福祉については84%の学生が関心を持っており，交流の経験がある学生はボランティア活動にも意欲的である。交流と体験は，障害者理解のための意識改革と実践のきっかけとなるので有効な方法であると言える。

本部だより

1996年6月29、30日に、日本家庭科教育学会第39回大会が、東京の国立教育会館で開催されました。69件の研究発表、講演会、総会がありました。講演会は、第15期中央教育審議会の中間まとめが発表された直後でしたので、審議会の第一小分科会座長の河野重男先生の「21世紀を展望した教育と学校」と題するお話で、審議会の裏話を含めて、家庭科への期待も話され、新しい家庭科への示唆を得るものでした。

総会では、本地区からの評議員として福田公子が新たに承認され、留任の多々納道子先生と二人があたることになりました。また、特に学会誌の投稿規定が改正された旨の報告がありました。

次期教育課程の改訂を視野に入れ、学会の総力をあげて取り組んできた「21世紀の拓かれた家庭生活を創る小・中・高等学校家庭科の構想研究」のための基礎的な調査結果をまとめた『小・中・高等学校家庭科の新構想研究―資料編―』と題する報告書が完成しました。

1996年度の例会は、11月16日に東京学芸大学で開催され、研究発表、「家庭科教育の基本構想」と題するシンポジウムがもたれました。この折りに開催された評議員会において、平成10年度第41回日本家庭科教育学会全国大会が当中国地区の広島大学で開催されることが内定しました。平成9年度は日本家庭科教育学会の創立40周年にあたるため、40周年の記念誌の発行、家庭科教育の新構想研究『家庭科21世紀プラン』の刊行などが確認されました。

家庭科教育セミナーは平成9年3月26日、お茶の水女子大学にて、これからの「家族」教育―カリキュラム構想とその教材開発―のテーマで開かれました。

1997年度の第40回大会は、平成9年7月4日～6日、国立教育会館にて開催の予定です。学会創立40周年の記念大会になりますので、さまざまな行事が予定されています。

(福田公子)

【新入会員・退会会員者名簿】

新入会員

鳥取県

伊藤紀子　鳥取大学教育学部（教官）
八木有子　鳥取大学教育学部（大学院生）
山田智子　県立赤碕高等学校

島根県

曽我部國久　島根大学教育学部（教官）
池田綾子　島根大学教育学部（大学院生）
平井早苗　島根大学教育学部附属小学校

岡山県

立石綾子　県立津山高等学校

広島県

小田寿子　広島市立可部小学校
久島　恵　広島大学学校教育学部（大学院生
西楽慈子　広島大学学校教育学部（大学院生
北乗弓果　広島大学学校教育学部（大学院生
山本奈美　広島大学学校教育学部（大学院生
山本かほり　広島大学教育学部（大学院生）

退会会員（1997年 3月末）

鳥取県

堀内かおる

山口県

二宮慶枝、平中寿江、植山靖子

広島県

丸尾譲、稲田準子、磯崎尚子、水野晶子

岡山県

原田公子、野田昌枝

事務局だより

1　おわび

事務局の仕事が滞りがちで、ご迷惑をおかけしています。会費納入についてもやかましく申しました。お陰様で、ほとんどの方から、納入いただきました。すでに退会なさっておられる方や納入いただいている方まで催促したようです。お許しください。

さて、平成10年度の全国大会を当地区で引き受けるとしますと、経費の積立が必要です。今回は印刷製本代を浮かせるために、島根大学生の助けを得て作りました。また、名簿作成も遅れていましたので、最後につけました。

住所変更や改姓なされた方は次にお知らせください。

事務局　〒690　松江市西川津町1060
島根大学教育学部　猪野研究室
℡0852-32-6352（ダイヤルイン　Fax兼用）

2　研究発表会

第17回研究発表会並びに総会は，1997年 8 月30日（土）に岡山大学教育学部で開催されます。研究発表を希望されます方は，同封の研究発表申込用紙に必要事項を記入して， 5 月16日までに岡山大学教育学部佐藤研究室宛ご送付ください。会員の皆さまの多数のご参加をお待ちしています。

3　地区会費納入について

1997年度の地区会費を同封の振替用紙でご送金ください。それ以前の会費未納の方はあわせて納入くださいますようお願いいたします。なお、平成９年度会費をすでに納めていただきました方には、振替用紙は入れておりません。

年会費　　１０００円

振替口座　　０１４５０－７－５２５２
加入者名　　日本家庭科教育学会中国地区会

編集後記

会報17号をお届けします。

ご執筆いただきました先生方にはお忙しいなか本当にありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

全国大会に向けて、共同研究にどしどしご参加ください。共同研究の申し込みをなさっておられない方でも十分間に合いますから。

また、共同研究のテーマについての学習の必要性を提案してくださっていますので、そのような機会をいつかもてればと考えています。（猪野）